

平畑静塔第一句集 『月下の俘虜』（昭和三十年・1955年・五十歳）

藁塚に一つの強き棒挿さる

資料1

略歴

明治三十八年〜平成九年（1905〜1997）九十二歳
和歌山県和歌浦町生まれ。三高から、昭和六年京都帝国大学医学部卒業。十二年、精神科医として兵庫県立精神病院に赴任。十九年応召、軟禁陸軍病配属。二十一年帰還後、大阪女子医専教授。大阪京阪病院長などの後、三十七年、宇都宮病院長。

俳歴に関わるものとしては、大正十四年「京鹿子」、昭和元年「馬酔木」、三年には「ホトトギス」に投句、山口誓子、水原秋櫻子、高濱虚子に出合う。七年、井上白文地、中村三山らと「京大俳句」創刊（新興俳句運動の始まり）、のちに西東三鬼もこれに参加。十六年、治安維持法違反の嫌疑で検挙さる（俳句弾圧事件）。戦後二十一年、三鬼、右城暮石、橋本多佳子らと奈良句会発足、二十三年誓子を主宰として「天狼」創刊、編集。二十六年、西宮トラピストの野田神父に出会い受洗。「俳人格」（二十六年）ほかの評論により三十四年、第一回スバル賞、『壺国』ほかにより四十六年、第五回蛇笏賞、六十一年、『矢素』により第一回詩歌文学館賞、平成七年、第七回現代俳句協会大賞受賞。

句集 『月下の俘虜』『旅鶴』『栃木集』『壺国』『漁歌』『矢素』『竹柏』

資料2 作品

(一) 初期作品 (大正十五年～昭和十五年)
海苔舟に花の雲あり紀三井寺 巻頭句
狂院に身は宿直にて大文字 しかしすでにこうした身边詠
三伏の街の狂者に日日むかふ
病囚の眼に夏山の峯の数

京大俳句世に出づ
新春の人立つ書肆に今日も来る
道中の娼家の鏡かゞやける
驅黴薬少女に注すと日は蝕える
絶巔へケーブル賭博者を乗せたり
病院船海豚に花は棄てらるる
軍需工の列を凝然と見て過ぐす

(二) 終戦以後 (昭和二十年～二十二年)
上海集中營
徐々に徐々に月下の俘虜として進む
帰還

寒潮をまたぎ逐はるる国を離る
冬海へ光る肩章投げすてぬ
三鬼、六林男と紀州行
蜜柑山の播鉢谷を出ぬ母よ
赤煮えの蚕が初湯を出て歩く
手にゲートルそして春山ひた登る

(三) 天狼時代 (昭和二十三年～二十八年)
長島行 十八句
寄らむとし外寝あらはの癩との距離
癩童子なりや夏樹に顔隠す
無花果を食ふ天刑の名をうけて
我を遂に癩の踊の輪に投ず
主ならねど癩と踊りて我汗す

妻と寝て除夜の暁のひろがれる
斧を振る妻の臂力に除夜の星

藁塚に一つの強き棒挿さる

柘榴の花女の中のわが職場

葡萄垂れさがる如くに教へたし

藁塚を見る白兵の記憶にて

言ふは皆妄語や傾ぐ藁塚や

藁塚に充てる力や押せばある

うづたかき処女の膝置く桜の園

洗礼や縮れて落ちる薔薇の瓣

螢火となり鉄門を洩れいでし

狂ひても母乳は白し蜂光る

寒廚の濡手聖書に触れむとし

受洗未だ岩の裂け目に芽木繁る

狂女なりしを召使はれて夜長し

受洗 西宮トラピスト

大足の使徒となるかな旅を脱ぐ

雪片と耶蘇名ルカとを身に着けし

胡桃割る聖書の万の字をとぎし

鳩踏む地かたくすこやか聖五月

神父の手肉色走り蠅はらふ

聖書に咲く黄黴青黴虚構ならず

つゝましき飛雪あそぶや鉄格子

死にて生きてかなぶんぶんが高く去る

見せられぬ聖狂女ありきりぎりす

選ばれて摘まれて葡萄地に置かる

毛絲玉廻る狂女の膝の谷

後記

・私は現在の自己の未熟と薄弱と狭量を克服してゆく希望を燃やす。欠けたる事の多きを愉しむ。・医人であり、又家長であり、又不安の世紀を肩に負うて、私は師と友と知己との前に、このことを誓ふのみである。…

山本健吉『現代俳句』

…彼の最高の課題であるべき「カトリック的人格」の完成とこの「俳人格」とは、いかに矛盾し、あるいは統一されるものであるか、明らかにされてはいない。「俳人格の完成」とは彼の文学の方法の結語であり、「カトリック的人格の完成」とは彼の人間としての決意と行為との目標である。そして作品とは、彼の行為の尤^よたるものであるはずだ。…(これら)註・長島行連作)の中で、この句がもつとも彼の「カトリック的人格」を示していると言えるだろう。「我を遂に」と言い、「投ず」と言ったところに、彼を一つの行為にまで駆り立てた決意と信仰とが示されているからだ。もつとも「我を遂に」救癩事業に投ぜしめたわけではあるまいと言ったら、酷薄な批評に失しようか。…だが彼の言う「特殊文学」としての俳句という点から見れば、「我を遂に」の句はなんらイロニクな把握を持っていない点で、俳句固有の骨格を持っているとは言えないのである。六つの単語を一本調子に結び合わせて、散文的に奇もなく言い下している。彼の俳句理論は、彼の作品におけるアリバイだ。新興俳句時代の過誤がまだ相当残っているようだ。…

資料3

『俳人格』「自由考」

…前線から送られてくる心と身体を傷められてしまった人間をみとりながら、私の自由は、中国の星をいただきながら読みつづけたヤスパースの横文字の世界に耽ることだけに存在していた。驚くべき、それこそ我が身にこれほどの精励無私の忠義ぶりがあったのかと訝しむばかりで、いわゆるゲリラのひそむかもしれぬ中国の田園のクリークを、何十人の傷病者を舟に乗せて何里かの行程を指揮して、平然と命令による義務を遂行したのも、ひとえには、義務を完全に果たすことが私にとっての自由なりと観念しきっていたからであったのである。

る。これも一つの没頭ということなのだ。：周りに堅い有形無形の束縛があっても、没頭に
よって人間の尊厳を守ってゆける自由というものがある。

資料4

『俳人格』『不実物語』

「川を見るバナナの皮は手より落ち 虚子」について

この虚子バナナの一句をよんで、誰も感動深く心がゆれることはあるまい。川崎(展宏)氏もこの句に「作句以前の作者の心に詩的感動はないと考えるのが当然でしょう」と言う。この詩的感動というのが私の心に強くひびく。(検査から兵役の間の精神的な空白状態から復活途端に、この虚子のバナナの一句にはっと目が覚される潜在力が、貯えられることになったのかもしれないと思うだけである。四S全盛時代に酩酊した夢がこの空白の間に漂白されてしまったのかもしれないのである。無感動無味乾燥な人生になじめば、いつの間にか無感動が心身にゆきわたってしまって、無感動の中にも、生きゆくまことの価値をおのずとわきまえるようになっていたのだとしか思いようがないのである。：無感動無表情の恐るべき価値…

資料5

『虚子俳話』『伝統俳句』

人間性、社会性に重きを置くことは季と優位を争ふことになる。勢ひ俳句ではないものを産むことになる。／諸君(註・大野林火・中村草田男)の志す処の如くんば、何故全然束縛のない新しい詩型を選ばないのか。」

「偉大なるかな」

社会、人事の針小の事にのみ拘泥する事を止め(否、止めずともよいが、そればかりに終始せず)偉大なる四季変遷の中に任つて、踵で大きな息をして見てはどうかといふ感じも起る。

『俳句』『ものあわれ 二』

人は戦争をする。悲しいことだ。しかし蟻も戦争をする。蜂もする。墓もする。その外よく見ると獣も魚も虫も皆互に相食む。草木の類も互に相侵す。これも悲しいことだ。何だか宇宙の力が自然にそうさすのではなからうか。そこにもものあわれが感じられる。

「研究座談会 五」 なぜ季題趣味がいけないのですかね。

資料6

根源俳句 慄然俳句(山本健吉評)

かりかりと螳螂蜂の兒を食む 誓子

冷水を湛ふ水甕の底にまで 同

根源俳句は水甕の句に止めをさすと言っている位である。(『平畑静塔俳論集』「所謂根源俳句と写生」)

資料7

山口誓子・序

：戦争がすんで久しい時の距たりの後に見た君は、私の眼には「沈鬱の人」として映った。さう見た瞬間君の生活が君を沈鬱の人とし、君を深めたのだと思つた。そして今にして思へば、君の俳句形成にもつとも強い力となつたのはこれではなかつたか。：君の眼は常に精神病医たる自己の生活と信仰生活とに向けられてゐる。向けたとなつたら金輪際、眼をその生活から外さない。これほど執拗な凝視が又とあるであらうか。君の句を通して誰しも感ずるであらうところは、君によって捉へられた「物」(虚子先生の所謂「事実」)が、ねばりつき、からみつくやうにねつとりと捉へられてゐることである。：君が若き日に読み、いまでも関心を失はずにゐる斎藤茂吉先生の生命短歌に相通ずるものがあるのではあるまいか。：

資料8

『俳人格』「がらくた心中」

昭和二十九年であるから、まだ西東三鬼が大阪の香里園に住み、元気に「天狼」のこゝを取りしきつていたころであつたし、私の第一句集『月下の俘虜』が出版されようとしていたときである。その年のある日ある会合で、三鬼が持参してきた「萬緑」を出して、「静塔よ、面白いことこれ以上ないという俳句があるぞ」と示されたのは、中村草田男の、

がらくた荷離さで転落青谷へ

の一句であつた。その何年か前にも、三鬼が私に見せて、もう一度ともに唸り合つたのが、やはり草田男の一句で、それは、

蟻螂は馬車に逃げられし馭者のさま

で、句集『来し方行方』から引き出して、二人で感に入つたこともあり、

厚館割ればシクと音して雲の峯

は大分あとのことであるが、「元氣が出るね。こんな俳句を見せられると」と共鳴を求めに来たこともあり、自らを草田男第一のファンと自認していたのもなつかしいついこの間のようなことである。

「眼前の人 ―草田男の思い出―」 昭和五十八年萬緑葬ののち

もはやこれだけの俳人に今生では二度と接することはあるまい。